

中国民間文芸の近況

王 汝 瀾
花 井 操・抄 訳

日本口承文藝學會のお招きにより、私は昨年（一九八二年）三月にも、中国民間文芸研究会訪日団の一員として日本を訪れ、諸先生方の心からのおもてなしを受け、多くの収穫があった。ここに重ねてお礼を申し上げる。

このたびの来日の機会を借りて、最近の発展著しい我が国民間文芸の状況を紹介させていただきたい。

一 機構の設置、組織の編成

口承文芸界の全国組織である中国民間文芸研究会（以下、民研会と略す）は、一九六六年以前、つまり文化大革命以前では、全国会員（省レベルの地方会員は除く）は三百人余にすぎず、分会も八つだけであった。今では全国会員は八百四十人余りに増え（訳注・最近の報告によれば一九八四年十一月で一千四百人）、分会は、台湾省を除く各省、市、自治区にそれぞれ分会が設置された。三十あまりの大学で民間文学の講義が設けられ、多くの人材を養成しており、さらに各地の文化館などで養成訓練班を積極的に開催している。

河北省分会は、一九八二年三月、講習会を開き、実地採集、作品

の編集選択の講習をおこなったが、これに三十数人が参加した。

四川省分会と宜賓地区文化館は、一九八二年三月に講習会を共同で開催し、これに約三十人が参加した。この種の講習会が、その他の地区で前後五回開催された。

湖北省分会、省内の八地区、一市で養成訓練班を作ったが、一期につき三十人が参加した。養成された幹部は、各職場に戻ったのち基層訓練班の指導者となり、各層の養成は雪ダルマ式に人員を増していった。前後六回催して、三百人がこれに参加した。

遼寧省分会は、巡回講座や講習会などの方法で、養成訓練の事業を積極的にくりひろげた。一九八〇年以来、全省で、民間文学巡回講座を十八回、講習会を十七回催し、前後あわせて二千三百人余が参加した。

浙江省分会は、この数年来、養成訓練班を通じて、すでに千二百名余の民間文学の専業指導者とボランティアの指導者を養成した。

広西省分会は、合計八十数人が参加したチワン族の歌手養成訓練班を催し、期間（一九八一—一九八二年）を一年と限った。養成訓練は三段階に分けておこなわれた。第一段階は、チワン文字を勉強し、自分のよく知っている歌謡、昔話を記録する。第二段階では、

民間文学理論の講義を受ける。第三段階は、新しく学習した知識にもとづいて、資料を整理しなおし、各歌手は一冊から三冊の資料を作成し、原稿を出版社へ渡して選集として役立てる。

このほか、雲南、福建、江蘇、安徽、甘肅、寧夏、青海などの省でも、それぞれ類似的の民間文学養成班が催され、五十人から三百人がこれに参加した。

中国民研会は、一九八二年七月、北京で各地の養成班の経験交流会を開いた。会には七十余人の代表が参加して、各地の経験を総括した。

二 採集、整理、研究、出版の情況

(一) 採集、整理情況

近年来、民間文学の調査採集と記録工作は、実に喜ばしい情勢にある。多くの大学教師は、学生を連れて民間に深く入り、実地に採集記録することにより、非常によい成績をあげることができた。各地の民研会分会と関係部門は養成班を共同で催したり、各種の採集隊を組織し、特定のテーマの採集や一定範囲内の全面調査をおこなった。

三部の史詩に関する緊急の採集工作は、現在進展中である。

現在、チベット族の英雄史詩「ケサル」の採集整理は、すでに国の重要科学研究テーマに指定されており、中国社会科学院少数民族文学研究所の責任により、チベット、四川、青海、甘肅、雲南、新疆、内モンゴルなどの省、区の関係部門と共同で完成することが

できた。

目下、「ケサル」に関する仕事の重点は、民間芸人の歌詞を緊急に採集することである。不完全な統計によれば、チベット、四川、甘肅、青海、雲南などの省、区では、近年すでに三十数部の手書き本や木刻本（重複した各種異文本を含まない）を採集している。すでに発見された「ケサル」は、全部で約百十部あり、およそ二千万字以上となっている。

わが国の新疆モンゴル族地区で採集されたモンゴル族の史詩「江格爾」は、全部で四十八部（不完全な数部も含む）あり、七、八万行の長さには達している。

キルギス族の史詩「マナス」については、この数年すでに歌手のニ素普・瑪瑪依が歌った全八部の作品が改めて記録され、目下中国語に翻訳中である。

(二) 研究情況

近年来、民間文学の研究部門は、いちじるしい進展を見せている。いくつかの省、市、自治区の社会科学院文学研究所は、民間文学研究組を作り、また北京師範大学中文科と雲南大学中文科は民間文学研究室を作った。中央民族学院、西北民族学院、雲南民族学院などでは、民間文学研究の組織を設立し、研究人員はしだいに拡充されつつある。また民間文学専攻の大学院も制度的に復活され、一九八二年七月、北京師範大学の鍾敬文先生の指導のもとに、六名が修士を取得した。

一九八一年十二月、江蘇省分会が主催した第一回呉歌學術討論会が蘇州で開かれた。上海、浙江、江蘇、北京、寧夏などの省、市からやって来た四十数人の代表が、呉歌の概念、起源芸術的特色などについて討論を展開した。

一九八二年七月、甘肅省分会が主催した第二回「花兒」の學術討論会が蘭州で開かれ、参加者は五十人あまりであった。三十九篇の論文が提出され、「花兒」の民族的帰属問題、流派、音楽的特色などの討論がなされた。

一九八二年八月、新疆ウイグル自治区のウルムチで、初めて「江格爾」の學術討論会が催された。会議には三十七篇の學術論文と調査報告が提出された。

一九八二年四月上旬、民研会は北京の西山で第二回年会（年一回の研究集会）を催した。北京や全国各省、市、自治区からやって来た代表は全部で百余人。七十数人の研究者が神話、史詩、伝説、昔話、歌謡、民俗などの論文を発表した。

近年来、河南省で多くの神話、伝説を採集した河南師範大学の張振掣副教授は、古代神話の歴史の変遷に対する探索を通じて、古代神話が人民大衆の中に伝わった様子を明らかにした。

今春からシルク・ロードの民俗調査を始めた蘭州大学の柯楊副教授は中国のマンドリルヒヒとブラジルの森の神について比較研究した論文を発表した。チベットでチベット族民間文学の仕事に二十数年間従事して来た廖東凡は、昔話の同一タイプの種々の異文に関する比較研究の成果を報告した。

会議の期間中、中国民研会副主席鍾敬文氏は、「新しい民間文学

学を樹立する構想」と題する講演をおこなった。会議はさらに鍾敬文氏が民間文学の仕事に六十年間従事されてきたことを記念して座談会を催し、周揚、林黙涵、林林、趙尋などの指導者が会であいさつをして祝った。

一九八三年四月中旬、中国少数民族文学学会は、第二回年会を广西チワン族自治区の武鳴で開催した。参加者は全国からやって来た十八の省、市、自治区の代表百四十数人、二十三民族の少数民族文学研究者、教師および特に招かれた代表などであった。大会には百十二篇の學術論文が提出された。

一九八三年八月、中国社会科学院少数民族文学研究所は青海省の南寧で「史詩討論会」を主催し、出席者は十二の省、市、自治区と十五の兄弟民族から参加した計百余人で、提出された八十六篇の論文の半数以上は「ケサル」と「江格爾」に関するものであった。

また同月、河北省の民研分会と秦皇島市文連は孟姜女故事の學術討論会を共同主催した。参加者は約三十人、十余篇の論文が提出された。

(三) 出版情况

現在、全国の省、市、自治区の公開発行の民間文学関係の刊行物は、文革以前の三種類からすでに二十数種類に増えている。新しい刊行物には、雲南の『山茶』、上海の『采風』、『故事会』、浙江省の『山海経』、貴州の『南風』、広東の『天南』、『山西民間文学』、『新疆民間文学』、『吉林民間文学（現在は『民間故事』と改名）』、安徽省の『郷音』などがある。また発行部数が二十万部以上に達す

る全国的な民間文学理論誌『民間文学論壇』と上海分会の『民間文学集刊』は、民間文学工作者たちに理論の場を提供している。民間文学書の出版もふえつづけており、中国民間文学出版社、上海文艺出版社、雲南人民出版社だけでも二百種近くの本を出版している。

その中には作品選集、個人の著作（たとえば『鍾敬文民間文学論集』、賈芝の『新園集』など）、学術論文集（たとえば『中国民間文学論文選』）、概論書（たとえば鍾敬文主編の『民間文学概論』、烏丙安、張紫農、段宝林などの概論、基礎知識など）が含まれている。

毛星主編の『中国少数民族文学』全三冊は、まもなく湖南人民出版社から出版されることになっており、系統的、全面的にわが国の五十五の少数民族のすぐれた文学の成果を紹介したものである。さらに袁珂編の『神話伝説辞典』もまもなく出版されることになっている。

国外の民間文学紹介では、関敬吾先生の『日本の昔ばなし』の二種類の抄訳本が、すでに北京と上海から前後して出版されている。

また丁乃通の『中国民間故事類型索引』の訳本が、まもなく遼寧省の春風出版社から出版される。

一九八三年春、中国民研会の工作会議の席上、『中国民間故事集成』、『中国歌謡集成』、『中国諺語集成』を編集出版する問題について、討論が展開された。参会した代表たちは、三十年來のわが国各地区、各民族民間文学の採集成果を、広大な読者に提供すること、ならびに民間文学研究および国際文化交流のために条件を提供すること、これらの仕事に今からすぐ着手する必要があるということ

確認した。この決議は文化部、国家民族事務委員会および中国文学芸術家聯合会の支持を得た。

総じて言えば、中国の民間文学の事業は勢いよく發展しており、人材が輩出し、そう遠くない時期に、新しい成果が得られ、中国の民間文学の園は輝きを増し、中日民間文学の相互交流にますます多くの貢献をするであろう。

(ワン・ルー・ラン、中国民間文学研究会)